保育「環境」の構成と子どもの多文化理解

－アメリカの幼稚園の事例を参考に－

五十嵐　紗織

1．はじめに

幼稚園や保育所で子どもたちが過ごす時間は、すべて「環境」に接している。一口に環境といっても、保育者や園舎、自然物、遊具など、枚挙にいとまがない。幼児期の子どもにとって、心身の成長に沿った適切な環境の構成は必要不可欠であり、幼稚園教諭や保育士といった保育者は、保育環境の奥の深さを知っている。

幼稚園教育要領においては、その第一文目に、「幼稚園における教育は、生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要なものであり、(…中略)幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行なうものであることを基本とする。」とあり、幼児教育が環境の上に成り立っていることがわかる[1]。教師は、幼児の主体的な活動を確保する為に、「幼児と人やものとのかかわりが重要」であることを認識し、「計画的に」物的・空間的環境を構成しなければならないとも示される。このように、幼児のイメージを広げて遊びを継続させたり、新たな発見をしたりするような豊かな環境構成が必要とされている。

乳幼児期の環境の構成、特に空間的な構成について、これまでにも多くの調査研究がなされている。たとえば無藤は、園の改装のみならず、ものの配置を検討することによって子どもの活動の変容を見直すことにつながると指摘している[2]。

乳児保育室の空間をどのように構成するか、構成を変更されることにとって乳児の遊びへの対応がどのように変化するのかという汐見ら[3]の研究は、これまである意味で経験や感覚のような保育者のコツで決められてきた乳児室の構成に一石を投じている。その研究によると、単一で、しかも一定の広さのある経路上に動・静的なより規模の小さい空間を複数配置すると、子どもの行動はより落ち着き、集中度が高くなる傾向が示されている。保育者においては、子どもの変容を通じて自らの保育を振り返るきっかけとなり、空間環境への意識の変化が表れた。さらに、保育者自身の話し合いを重ねることによって悩みの共有を機に、保育者としての集団の良さにも気付くようになっていった。

海外の幼稚園・保育施設における環境構成への取り組みについては、横井らの研究が詳しい[4]。環境の中でも季節感の指導に特に注目し、日本の幼稚園・保育所の実情並びにドイツ・オーストラリアの実践事例を比較し、検討を加えている。その中で、ドイツのある日本人幼稚園では「日本とドイツの両方をバランスよく体験させること」すなわち「中庸」をその保育理念の中心に据えている。ドイツと日本のそれぞれの文化に配慮しながら、季節感を育む環境づくりをしていることが示されている。一方、オーストラリアのある保育施設では、新しい都市ということもあってか、宗教色や歴史を感じさせる行事が比較的少なく、気候や天候の中から季節を楽しみながら学ぶことに重きが置かれていると指摘する。

横井らの研究のように、保育環境について海外の施設との差異を論じている研究は非常に少なく、まして多文化理解の視点を持った保育環境に関する研究は、管見の限りほとんど見当たらなかった。日本と諸外国との保育の違いを比較した研究に関しては、アメリカの幼児教育や保育の制度を取り上げた研究論文は数多く散見される。ただし、それらの多くはシステムに関するものであり、保育の環境に焦点を絞ったものではない。そこで本研究では、アメリカの幼稚園の環境の事例の検討を通して、日本の多文化保育における環境の構成への示唆を得ることを目的とする。なお、本論において「日本における一般的な園」というような表現を用いるが、その意図に当てはまらない施設も数多くあることは充分承知している。だが、本論における本質的問題ではないと判断し、使用していることをご容赦いただきたい。

2．日本における外国とつながりのある子どもたち

日本国内の小・中・高校に通う外国人児童生徒は、約７万3000人（平成23年）おり[5]、そのうちの４割弱に当たる２万9000人に日本語の指導が必要とされている（平成22年）[6]。このような外国人児童生徒教育に関わる様々な立場のおとなが、どのように協力して取り組んでいくかというテキストの一つとして示されているのが、「外国人児童生徒受入れの手引き」である[7]。実際の教育現場では、専門的な知識や経験が十分でない教員が指導に当たることも少なくないと予想され、該当する児童生徒にかかわる全ての教員に対する研修も重要となっている。文部科学省初等中等教育局国際教育課が運営する「かすたねっと」というウェブサイトの中では、全国で公開されている多言語の教材検索ができるようになっている。日本各地の教員や支援スタッフの衆知を集め、外国人児童生徒に関わる学習や言語指導のノウハウを共有していこうという取り

組みである。このサイトでは、多言語を用いた教材や資料が多数公開され、実際の授業などに生かすことができる[8]。このように、小・中・高校の外国とかかわりのある児童生徒への指導は、様々な方法で拡大している。

一方、幼児期の外国とかかわりのある子どもたちに対する支援が十分浸透しているかという点については、楽観視できない状況である。平成20年度の調査[9]では、各地方自治体管下の保育所について、外国籍の児童の入所を把握していると答えたのは22都道府県(46.8%)であり、現場の状況が十分把握できていない様相を呈している。外国児保育へのガイドラインに関する調査では、都道府県レベルでの作成はなく、政令指定都市の大阪市と中核市の東大阪市の２市にとどまった。すなわち、外国籍の幼児の保育所への受け入れに関しては、各市町村もしくはそれぞれの保育所ごとでの対応を余儀なくされており、模索の中で保育がなされているといえる。

それでは、外国児童を受け入れている保育所において、保育者の判断や対応はどのようになされているだろうか。内田は、様々な言葉や生活習慣を持ち、日本文化と家庭文化との差異が大きく、他の子どもたちに比べて多くの課題に直面しなければならない子どものことを広い意味で「外国とつながりのある子ども」ととらえ、新人保育者とその児とのかかわりを保育者自身の語りによって明らかにしている[10]。その中で、①保育者自身の幼少期に外国籍の子どもが身近にいた場合、具体的な困難さには知識がないものの受け入れには比較的柔軟な姿勢を示す。②先輩保育士や母語通訳コーディネーターの手助けを借りながら、母語資源の活用や保護者との関係構築のコツを学ぶ。③言語や家庭文化の違いではなく、その子自身の個性に起因するという視点を得る。④養成校での学びが十分に活用されていない。などの点を指摘している。

ただし、外国とつながりのある子どもといっても、各々の家庭の事情も多様化している。菅田は、保護者の留学を目的に来日している外国籍の子どもの、日本の保育所への適応過程を追っている[11]。その中で、外国籍児童の保護者と保育者の認識の溝が埋められないままに、保育者主導で保育が進められている点を指摘した。日本においての適応に重点を置いた保育が行われたことにより、母国へ帰国した後の再適応に対する保護者の不安は増出することとなった。保育者は、日本の幼児との差異がわからなくなるような同化を求めるような適応ではなく、母語や母国文化への関心を高める働きかけを行なっていくなど、保護者の多様な希望や家庭状況も勘案する必要がある。

３．アメリカにおける保育・幼児教育

アメリカにおける保育・幼児教育の現状に入る前に、アメリカの多文化理解教育に簡単に触れておきたい。様々な人種の子どもを受け入れているからということだけでなく、アメリカという学校文化そのものが、多文化に適応しているともいえよう。梶田は、英語のテキストの中に多くのマイノリティーの人物像が登場することを挙げ、意図的に編纂されていると述べている[12]。教科書の内容については、日本・中国・インド･アフリカや北欧の国々の昔話、アメリカのマイノリティーの伝説なども掲載され、とりわけ、アメリカ・インディアンの物語やエスキモーの伝説、アフリカの民話は身近な異文化を知るための非常に重要な教材領域になっていると指摘する。さらに、学校の様々な行事に多文化を積極的に受容することが試みられているという。

続いて、アメリカの幼児期の教育・保育の制度の概観について取り上げたい。アメリカにおいて幼児期は、誕生してから８歳まで(birth－８)とされる。小学校低学年までを「幼児期」という括りでとらえるため、乳幼児期の子どもへのサービス活動全体を指し示す用語としては、「幼児教育」というよりも「幼児期のプログラム」のほうが適当であるといえるほど、様々なサービス・施設がある[13]。日本における保育所に近い役割を担っているのが保育センター（child care)であり、働く母親のために設けられた施設で、多くは３～５歳児を対象に約10時間の保育が行われている。

３～４歳児を対象とした教育プログラムは、保育学校(nursery school)、プレスクール(preschool education・pre-kindergarten education)などがあり、遊びを通した活動的な場が用意されている。なお、日本においてプレスクールというと小学校入学以前のことを示すが、アメリカでは幼稚園が義務化されている州もあることから、幼稚園前教育のことを示している。

幼稚園に関しては、アメリカの地方自治制を反映し、入園時期や就園年数などが州法によって定められ、それぞれ異なっていることが前提ではあるが、５歳児は公立の幼稚園が一般的であり、入園を義務化している州もある[14]。その多くは小学校に付設されており、幼稚園は小学校の学年の一部のようにみなされている。小学校に上がる準備段階としての１年間という位置づけをされ、学校教育の一環とスムーズに連携していく役割を担っている。

初等・中等段階の教育制度に目を移そう。2002年、ブッシュ前大統領下で成立したNCLB法(No Child Life Behind Act of 2001：落ちこぼれをつくらないための法)により、アメリカ政府は移民や貧困層、障害を持った子どもなどの教育弱者に対する早い

時期からの支援と責任を州や学校に求めている。そしてNCLB法の制定は、初等・中等教育機関のみならず、幼児教育にも少なからず影響を与えている。NCLB法は、教育格差の是正と知的資産の再分配に十分な効果を発揮しているといえる。しかし、早期の教育の有用性が強調される一方、負の側面として、幼稚園の学校化が進み、テストのスコアを挙げるための基盤作りが始まっているかのようだと片山は指摘する[15]。幼少の滑らかなスライドに関する問題は、日本においても議論に挙げられるようになって久しい。そういった面では、アメリカの幼稚園制度はうまくいっているようにも見える。その一方、早期教育がヒートアップするあまり、幼児教育へのしわ寄せも次第に問題化されている。

４．幼稚園の事例の紹介

それでは、筆者が実際に見学したアメリカ合衆国ワシントン州のある幼稚園の様子を紹介しながら、多文化保育の環境について検討していきたい。ここで紹介する園は正確にはプレスクールであり、アメリカの幼児教育制度における「幼稚園」ではない。しかし、日本における幼稚園の時期と重なっている点、小学校と併設されていない独立した幼児教育の場である点、さらに保育の「環境」の視点から検討を加えるという本研究の目的といった点から、便宜的に幼稚園として記述を進める。写真撮影日は2013年９月５日である。

この幼稚園には、２歳から５歳までの30名弱のさまざまな国籍・人種の子どもたちが在籍している。英語のみを話す先生、英語とスペイン語を話す先生、中国語と英語と日本語を話す先生、英語と日本語を話す先生などが在籍しており、日によって出勤している保育者が異なる。子どもたちの通園に関しても、曜日を決めて週に２日や３日といった選択が可能である。芸術活動（Art）を保育の中心に据えており、毎日アートの時間がある。保育は、玄関からすぐの大きな活動室と、廊下を奥に進んだところにある小さな活動室（主に３歳未満児用）の２部屋が主な活動場所である。紙幅の都合上、大活動室を中心に紹介する。

写真①②に見られるように、室内はいくつかのスペースに区切られている。決して広くないが、それぞれのスペースが個別に設定されており、ままごと、絵本･パズル･積木・ごっこ遊び用の着替えなど、子どもたち自身の興味関心に応じて様々な遊びが多彩に展開されるようになっている。考えられた高さ、幅であり、子どもの遊びを制限することなく、他の子どもたちの気配を感じながら、自分の遊びに没頭できるとい

う点で非常に優れている。各コーナーに仕切ることによって、自分の好みの遊びに集中しやすい環境になっているといえるだろう。この空間環境は、保育者の視点から見ても優れており、一方の遊びの支援をしながらも、他の子どもたちの状況に常に意識と目を配ることができる配置になっている。

写真①

写真②

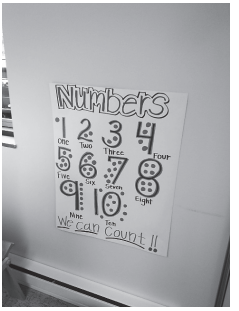
写真③は絵本コーナーである。英語の絵本のみならず、日本でも人気の「きんぎょがにげた」や「いいおかお」といった日本語の絵本も並ぶ。自分の好きな絵本を選び、じっくり絵本を読みふけることができる、落ち着いた環境が用意されている。また降園前の帰りの会での読み聞かせなどを通じて、様々な国の文化や生活に触れることも可能となっている。

写真④は、曜日・数・色などに関する掲示、⑤はアルファベット表、写真⑥・⑦は数に関する掲示である。全体的に色がはっきりとしており、カラフルな印象を受ける。このような、絵と文字・数字とを組み合せた色鮮やかな掲示が数多く見られた。

写真③

写真④

写真⑤



写真⑥

写真⑦

写真⑧は園庭である。駐車場からの通路の横にある園庭は、日本のそれと比べて決して広くない。遊具らしい遊具は、写真左部に写る滑り台のついた複合遊具のみで、その他には古タイヤが数本と、フラフープ、ままごとなどに使われるテーブルとイス数客がある程度である。住宅地の一画であるこの園では、これ以上の敷地の確保が難しかったのかもしれないが、子どものエネルギッシュな身体的活動を促す為には、いささか狭すぎる印象を持った。ただし、13時半に降園時間を迎えるため、その後の時間を家族と共に公園などでゆっくりと過ごすことを前提としているとも考えられる。園庭のその他の特徴としては、全面にウッドチップが敷き詰められている。このウッドチップは市内の公園などでもよく目にし、日本のように砂や土が露出する公園は少ない。クッション性が高く子どもたちの足腰に優しいこと、間伐材などの有効活用ということなどの可能性を感じるが、衛生面や子どもたちの遊びを制限することにならないかなどの点について、今後十分に検討する必要があろう。

写真⑧

写真⑨

写真⑨はトイレの様子である。各戸室内に幼児用の踏み台が置かれている様子に目を奪われる。トイレ同様、手洗い場にも踏み台が置かれており、トイレも手洗い場も大人用のサイズに設計されていた。日本の幼稚園であれば、子どもの成長のサイズに合わせたトイレ・手洗い場が設置されていることがほとんどである。トイレのサイズが子ども用でないからといって、子どもの成長を軽視していると簡単に判断すべきではないだろう。多くの家庭では、幼児期の子どもの成長に応じて踏み台や子ども用の便座などで対応しているであろうし、店舗などでも日本のような子ども用の便器はほとんど見当たらない。つまり、このような大人用のトイレや手洗い場に常に使用する環境に慣れておくことで、どのような環境のトイレでも使用にためらいを感じることが少なくなるといえる。くわえて、誰もが使いやすいトイレ環境は、ノーマライゼーションの意識を助長させることにつながるのでないかと考えられる。幼稚園だからといって、トイレや手洗い場を子ども専用のサイズにすることだけが最適だと一概にはいえず、日本における環境構成としても考慮に入れていく必要があろう。

写真⑩・⑪は子どもたちの作品であろう。毛糸などを髪の毛に見立てた似顔絵は廊下壁面に貼られ、絵の具やマジックを使った多彩な絵は、ツリーのように展示してあった。国や文化を超えて、子どもたちの自由で生き生きとした作品から子どもたちの息遣いが感じられて、非常に感動的であった。

写真⑩

写真⑪

当幼稚園の室内環境の全体的印象について、広くはないが、様々な遊びのスペースを実にうまく区切ってあるという印象を受ける。それぞれの遊びに没頭でき、またすぐに他の遊びにも移行できるような環境構成になっているといえる。

掲示されている内容は、数・曜日・色・時間など多岐にわたる。日本の幼稚園によく見られるような、季節や行事を意識したものは少なかったが、これは撮影時が新年

度前（９月初等）であったことも影響していると思われる。通年の予定の中では、様々な行事に合わせたアートや活動が計画されているようである。

また、壁面に貼られた掲示物の多くが市販品とみられる点は、保育者の手作りが中心的である日本における壁面構成と大きく異なっている。市販の物をうまく活用しながら、身近な数や文字になどに関心を持たせようという目的がみられる。日本の幼稚園と比較しても、数や文字、標識を意識させるような環境構成への意識は高いといえよう。このような壁面構成に関しては、前述の片山の指摘にもあるように、早期教育の一端も垣間見える。しかし、この園ではあくまでも多文化理解を意識した保育が中心で、早いうちからの多国語習得などを目指しているわけではないと感じられる。さまざまな文化や言語があることを感じながら、子どもらしさを損なわないような遊びを中心とした幼児教育が行われているという点において、評価できるのではないかと考える。

５．多文化保育に接する保護者の意識

次に、当該幼稚園に子どもを通園させている保護者に対する電話インタビュー調査を行なった結果を紹介する。インタビュー実施日は2015年２月７日。対象者は、日本人の夫の仕事によって家族で渡米し、３年目になる日本人の母親。転勤によって数か月後に帰国が予定されている。子どもは４歳３ヶ月の女児１人（調査時）。当該幼稚園に入園して２年が経過している。

筆者（以下Ｉ）：この幼稚園に行っていて、お子さんの様子はどうですか？

対象者（以下Ａ）：自由な雰囲気だから楽しそうにしている。嫌だ、行きたくないといったことは一度もない。ストレスはないと思う。

Ｉ：それはどうして？

Ａ：子どもにストレスを与えるようなことをするのが最もよくないことと、アメリカでは考えられているよう。だから、子どもの気ままにまかせているので、やりたくないことはやらなくていいし、団体行動も強いらない。自分の子ども（以下J子）も、外での体操をやっていないこともあるようです。

Ｉ：それでは、幼稚園での交友関係についてお聞かせ下さい。

Ａ：日本人は日本人で遊ぶことが多い。J子が一番仲のいい子は、日本人の女の子。もしくは、ハーフ（ここでは日本人とアメリカ人との間に生まれた子）の女の子と

遊ぶ。その子が大好きで。結局いつも日本語をしゃべれる子と遊んでいる。

Ｉ：英語は全く使わない？

Ａ：言っている事はわかるみたい。先生の指示で「ジャケット着るよ」とか「外へ行くよ」とか。親としては、もっと英語をしゃべれるようになるかと期待していたところもあるけど…。日本人の子どもとばかり遊んでいるから、結局しゃべれるようにならないみたい。

Ｉ：英語圏の子どもとは、かかわらないのですか？

Ａ：英語を使う子どもに対して、自分から遊びに誘うことはない。それは、J子の性格もあるのかな。でも、日本の幼稚園の話をすると、『日本に帰ったらオールジャパニーズがいい』って言っていた。

Ｉ：では、幼稚園の雰囲気について感じている事を聞かせてください。

Ａ：日本の幼稚園に通わせたことがないので比較があまりできないけど、集団行動が少ないのはちょっと心配。日本に帰ったときに、大丈夫かなって。自由なのはいいんだけどね。あとは体力。庭が狭いから、体力がついているかなって。それから、他のお母さんたちから聞くには、部屋の管理はいい方らしい。

Ｉ：管理というのは？

Ａ：比較的衛生的な感じ。こっちは土足だから、室内がもっと汚い園があるみたい。

Ｉ：室内に、数やアルファベット、曜日などの掲示がたくさんありましたが、そういうことを積極的に取り入れているのですか？

Ａ：あんまり「お勉強」的なことはしていない。ただ、毎日サークルタイムというのがあって、そこで、スパニッシュで数字は「１・２・３…」とか、曜日は日本語で「日曜日・月曜日…」とかいうのは、やっているみたい。工作の時間も毎日あって、粘土とかお絵かきとか、何か作ったりしている。日本人の先生がいるときは用意された工作をやったりするけど、そうでない先生のときはただ絵を描くだけとか、ステッカーを貼るだけとか、になっているみたいだけど。（注：日本人保育者が主にアート指導を担当しているため）

Ｉ：ありがとうございました。最後に一日の流れを教えて下さい。（右図）

9:30	登園
	アートの時間
10:00	自由遊び（園庭）
11:00	サークルタイム
11:30	昼食（弁当）
自由遊び	（室内）
13:00	帰りの会（本の読み聞かせなど）
13:30	降園

このインタビュー調査の内容について、簡単に考察を加えたい。インタビュー調査対象者のAさんは、在米期間が数年であることから、その間に子どもに少しでも英語力をつけさせたいと願い、当該幼稚園を選択したという。両親が日本人であるJ子さんにとり、家庭内で英語を耳にする時間はあまりない。両親とも家庭内では日本語で話し、テレビ番組も日本の番組のみを放送する「ジャパン　チャンネル」以外を見ることはほぼないからである。J子さんが日本語以外の言語に触れる機会は、スーパーマーケットや公立図書館などの外出先と、幼稚園の中にほとんど限られている。幼稚園でのJ子さんの様子について、あくまでの個人の性格も考慮に入れながらも、Aさんは「日本人は日本人と遊ぶ」と述べている。「もう少し英語ができるようになるかと思った」と母親として子どもの英語力の獲得に期待していた側面も垣間見える。

さらに、J子さんが母親であるAさんに、日本の幼稚園はオールジャパニーズがいいという発言をしたことは大変興味深い。J子さんが現在の暮らしに困難さを感じているというよりは、日本人としてのアイデンティティーの形成がなされてきているとみるべきなのではないだろうか。日本以外の土地で、母国語としての日本語を習得している最中であり、日本への帰国を控えた時期だからこそ感じる、日本に対する憧れのような興味関心が高まっている事が看取できる。

くわえて、日本と諸外国での子育て論の差異にも簡単に触れておきたい。事前聞き取り調査の中で、Aさんの次のような発言があった。「こっちでの幼児検診の際に、『子どもとは別に寝ているのか？』と保健師さんに聞かれたので、（AさんとJ子さんの寝室は一緒なのだが）『イエス』と答えておいた。保健師さんからは『日本のママは子どもと密着しすぎるから、もし一人で寝かせられないようなら、方法を教えてあげるわ』ということを言われた」というエピソードを話してくれた。日本と海外における子育てとを比較するとき、おんぶやしつけ、母乳や離乳食に至るまで、様々な場面での差異が度々指摘されている。中でも、アメリカには添い寝に否定的な傾向が依然として強くあり、日本における圧倒的な肯定論との間に溝があるという[16]。

アメリカで子育てをする日本人保護者が感じた困難点として、学校との意思疎通、保護者の英語力、日本語力やしつけなどの子ども側の問題などが挙げられている[17]。この調査を行った越山らは、慣れないことの連続で一時的には精神的に張りつめた状況になるが、親子の時間を持つ機会として、子どもにとっては貴重な時間ととらえることが大切であることなどを提案している。外国で子育てをする際に、文化や風習の違いに戸惑い、悩まされることも多いと聞く。保護者自身が海外での生活を不安に感じ、

その不安が必要以上に子どもに伝わってしまうこともあろう。

Aさん自身、不安と苦労を重ねながら、現地の人々とコミュニケーションをとり、アメリカでの生活になじもうとしている。J子さんも幼稚園に楽しく通園しており、現地での生活に順応しているといえる。英語圏の子どもとのかかわりについて、Aさんは“J子自身の個性”ともとらえており、この視点は母親だからこそ得られた認識である。日本人だから英語を話す子を遠ざけているのではなく、気の合った子がたまたま日本人の女の子であった、ということもできよう。日本語以外の言語をシャットアウトしているわけではなく、日本語以外の言葉を話す人がいることを知り、自分とは違う髪や肌や瞳の色があることを理解し、幼稚園の生活で必要な言葉や行動に十分に適応を示しているといえる。実際に、保育者の英語での指示は聞き取ることができているようであり、遊びの中で英語を中心に話す子どもと関わることも少なからずあるという。当該幼稚園では、様々な文化や家庭環境を持った子どもに加え、保育者も多様性を持った柔軟な職員が集まっており、人的な環境構成という面からも、多文化への理解を子どもたちに根付かせられる可能性が期待できる。

幼少期に日本以外の国で過ごす子どもたちのきっかけの多くは、親をはじめとするや家族の都合であろう。次第に環境に順応していくとはいえ、自分自身で日本か海外かを決めるという選択肢はなく、幼少期を海外で過ごすことになった子どもへの負担は計り知れない。子どもたちがより快適に海外での生活を送るためにも、生活や文化的多様性を受け入れる、このような性格を持った保育や教育の場の必要性が十分周知されるべきである。この事例は、日本における外国とかかわりのある子どもへの保育環境の構成に関する手がかりを示唆しているといえる。

6．おわりに

アメリカは人種のるつぼだ、といわれる。いや違う、混ざり合っているのではなくそれぞれが主張し合っているのだから、人種のサラダボールだともいう。だからといって、いがみ合いや諍いが全くない社会かといえば必ずしもそうとはいえない面もある。歴史の認識や移民の問題を無視することはできないし、貧困層や犯罪といった負の側面からも目をそらすことはできない。アメリカのみならず、われわれの生活は様々な民族、様々な文化、様々な宗教、様々な風習の上に成り立っている。しかし今現在、地球上のあちらこちらで異なる文化や思想を持った人々を容認しないばかりか、排除するような悲しい動きも後を絶たない。

私たちはしばしば、目の前にあるものだけ、自分自身が経験したことのあることだけ、自分の目や耳で見聞きしたものだけを「ふつう」と考えてしまうことがある。社会の変化とともに子どもたちを取り巻く環境も常に変化しており、その時代の変化を見極めながら保育をしていく必要がある。保育者に望まれる姿勢としては、保育者自身が考える「ふつう」を押し付けるのではなく、それぞれの家族が持つ文化や考え方の違いを尊重し、保護者との意見の相違に関しても互いに歩み寄る柔軟さを持って、子どもだけでなく保護者に対しても適切な支援をしていくことが重要である。多文化に身を置く人々の暮らしや考えに歩み寄り、配慮を必要する子どもたちに適切な支援ができる保育環境を整えていくことが求められている。今日、問題意識化され始めている多文化・多様性を受け入れた保育について、今後さらに個々のケースを踏まえながら検討していく必要があるだろう。

保育の「環境」とは何かと問われれば、人・もの・自然などとのかかわり全て…というような言葉は簡単に浮かぶ。しかし、子どもの生活者としての思いを受け止め、その思いや気づきを日々の保育に還元し、イメージを具現化していくことはたやすいことではないように感じる。国籍や言語、文化といった区別ではなく、すべての子どもが豊かな環境の中で思い切り遊び、遊びの中で得た体験を生活へと返していくようなサイクルの中で、生き生きとのびのびと育つことを願う。

最後に、調査に御協力頂いた全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。

参考・引用文献

1文部科学省(2008)幼稚園教育要領。チャイルド本社

2無藤隆(2012)保育実践と保育環境(総説)。保育学研究。第50巻第３号。４－７

3汐見稔幸・村上博文他(2012)乳児保育室の空間構成と
“子どもの行為及び保育者の意識”の変容。保育学研究。第50巻第３号。64－74

4横井一之・齊藤公彦他(2013)領域「環境」における季節感の指導について
―本邦幼稚園や保育園の現状、海外の幼稚園の比較も含めて―。
鈴鹿短期大学紀要第33号。227－242

5文部科学省(2011)学校基本調査

6文部科学省(2010)日本語指導が必要な外国児童生徒の受け入れ状況等に関する調査

7文部科学省(2011)外国児童生徒受入れの手引き

8帰国・外国人児童生徒教育のための情報検索サイトhttp://www.casta-net.jp/

9日本保育協会(2009)保育の国際化に関する調査研究報告書

10内田千春(2013)新人保育者の語りに見る外国につながりのある子どものいる保育。
共栄大学研究論集第11号。273－286

11菅田貴子(2006)外国籍幼児の保育所への適応過程に関する研究
―留学生家族の子どもの事例から見えてくるもの―。
保育学研究。第44号２巻。104－13

12梶田正巳(1997)異文化に育つ日本の子ども　アメリカの学校文化の中で。中公新書

13小暮美香(2002)諸外国の保育制度について(１)
―アメリカにおける幼児教育の考察から―。育英短期大学紀要第19号。47－56

14教育更生懇談会担当室(2008)

15片山紀子(2009) NCLB法に見るアメリカの幼児教育。
京都教育大学紀要No.114。63－75

16恒吉僚子・S.ブーコック編著(1997)育児の国際比較　子どもと社会と親たち。
NHKブックス

17佐藤郡衛・片岡裕子編著(2008)アメリカで育つ日本の子どもたち。明石書店。